

BZ離脱症状

長く医者をしていても、「これは初めて」「という経験をする。よく使う睡眠薬で、油断をしていたら、実際に副作用にくわして肝を冷やした。

85歳のYさん。寝つきが悪く、眠っても途中で目を覚まして眠った気がしない。あれこれと種類を変え、やっと落ち着いたのがベンゾジアゼピン(BZ)系の睡眠薬である。それから約10年、求められるままにその睡眠薬を処方してきた。もちろん「勝手に薬を止めないように」と、約束させていた。

だが、ある夜、その約束は簡単に破られた。奥さんが、夜遅く、腹痛と下痢を起したのだ。Yさんも眠ることはできない。当然、睡眠薬を使うことはなかった。翌朝、診察室に現れたYさんは、呂律が回らない。そのうえ、下顎から上半身に細かいふるえ(振戦)がみられるではないか。BZ離脱症状である。

BZ離脱症状とは、ベンゾジアゼピン系薬剤を長期にわたって使用した後、急に使用を中止または著しく減量したことで現れてくる症状である。稀だが、起きる人には

起きる。不眠、振戦、動悸や頭痛、ひどいものでは幻視や幻聴、時にはけいれんを起すこともある。二つ以上の症状があれば離脱と診断される。

となれば、まずは、離脱症状を取り除くことから始めなければなるまい。で、いつもより早めに、いつもの睡眠薬を同じ量飲んでもう一回にした。すると、服用20分後くらいには、下顎や手のふるえもなくなったという。

だが、医者の本当の仕事はここからだ。BZ離脱症状の予防には、時間をかけてBZの量を少しずつ減らしていく、ついには中止にもっていくしかないのだ。BZ系以外の睡眠薬に変える手もある。でも、Yさんの不眠は、そんな方法で落ち着くほどヤワなものではないと思う。さて、どうするワッシー。

(石黒修三=いしほくろニック・脳神経外科医・7/25北國新聞掲載)